

## 小笠原諸島のなりたち

琉球諸島とは異なり、小笠原諸島は海底が隆起して形成された海洋島で、一度も大陸とつながったことがありません。そのため、小笠原諸島の植物相はすべて島に偶然たどり着き、島の環境に適応して生き残った種子や胞子の子孫で形成されています。種子や胞子がこれらの島々にたどり着くには数多くのさまざまな方法が考えられます。例えば、海岸に流れ着いた可能性もありますし、流木に付着して海に浮かび、波に運ばれてきたのかもしれませんが。ランやシダ、コケなどの比較的軽い種子や胞子は風に吹かれて飛んできた可能性もあります。場合によっては、鳥の羽毛に絡まって島へたどり着いた種子や胞子もあるかもしれません。

小笠原諸島にたどり着き定着した植物は、アジア大陸や日本本土から隔離された状態で独自の進化の道を進み、ハワイやガラパゴスなど大陸とつながったことがない隔離された島々と同様に、特有の植物相が形成されました。小笠原諸島に自生する 400 種以上の植物のうち、40%以上が固有種です。樹木に限れば 70%近くが固有種となっています。

## 絶滅の危機

琉球諸島と同様に、小笠原諸島も自然環境の乱れとその結果としての生物多様性の喪失に直面しています。小笠原諸島で確認されている 400 種以上の維管束植物のうち、130 種以上が絶滅したか深刻な絶滅の危機にあり、情報不足により状況を正確に評価できない品種は 16 種にのぼります。

## 植物多様性の喪失への対策

小笠原諸島では、こうした植物多様性の喪失を食い止めるための対策がとられています。研究者たちは島での植物の生育状況にかかわる生態因子をよりよく理解できるよう尽力しており、こうした情報が絶滅危惧種の保護に役立つことが期待されます。また、ノヤギや特定外来種のネズミの食害による植物の喪失や生息地の乱れを防ぐことも必要とされています。